

九州支部

り、きわめて稀な例と考えられた。

60. 肺癌にネフローゼ症候群を合併した2症例

熊本地域医療センター呼吸器内科 柏原光介, 中村博幸

田島博之, 深井祐治, 千場 博

同 外科 稲吉 厚

同 病理 藏野良一

熊本大第3内科 富田正郎

症例1：65歳男性。ネフローゼ症候群(膜性腎症)の診断にて入院時、扁平上皮癌(c-T₂N₂M₀: IIIa)を認め、左上葉切除、化学治療にて尿蛋白は著明減少。症例2：56歳男性。SLEにて外来フォロー中に小細胞癌(c-T₃N₂M₀: IIIa)を認め、化学療法によりCR。その後、SLEの再発症状なく、ネフローゼ症候群(膜性腎症)出現。ステロイド、抗癌剤使用するも著変なし。症例1は肺癌との関連を、症例2は偶然の一一致を原因として考えた。

61. 尿崩症にて発症した肺癌の1例

国立長崎中央病院呼吸器科

峯 豊

同 内科 山中淳子

宇佐俊郎, 後藤嘉樹

同 神経内科 森 正孝

同 病理 藤井秀治

同 放射線科 森川 実

天本祐平

症例は70歳、女性。多尿、口渴を主訴として当院内科を受診し、尿崩症と診断。デスマプレンの点鼻を受けていた。胸部X線写真にて右S⁶中枢側に腫瘍陰影がみられた。気管支鏡を行い、B⁶入口部よりポリープ状に内腔に露出した腫瘍の生検により、腺癌と診断された。脳のMRIにて、下垂体に出血がみられ、転移による二次性所見と考えられた。

えられた。入院後、舌の右側の萎縮がみられ、舌下神経麻痺も認められた。

62. 肺芽細胞腫の1切除例

古賀病院呼吸器外科 林田良三

永松佳憲

同 呼吸器内科 古賀俊彦

73歳、男性の右下葉に原発した肺芽細胞腫に化学療法施行後、右中下葉切除を行った。病理組織像は多彩で、未熟な小型細胞、高分化腺癌、扁平上皮癌、間葉系細胞の増生、軟骨形成等見られた。胎児肺類似部分はわずかに認めるも、典型的でなく、更に病理組織学的検討が必要と思われる。

63. Pulmonary Blastomaの1例—組織化学的検討を中心

に—

大分医大第3内科 松本哲郎

杉崎勝教, 吉松哲之

水城まさみ, 原嶋文治

津田富康

同 第2外科 田中康一

同 第1病理 橋山繁生

Pulmonary Blastomaの腫瘍組織を用いて形態学的検討を行った。HEで大部分は胎児肺類似の組織像を呈し、一部に肉腫様部分や軟骨様部分を認めた。電顕では肉腫様細胞は幼若な形態を示し、上皮様細胞は核の管腔側偏位を特徴としていた。免疫染色では、上皮様部分はサイトケラチンに陽性であったがデスミンには陰性であった。一方、肉腫様部分はサイトケラチン、デスミンに陰性であった。

64. 肺原発性悪性リンパ腫の2例

鹿児島大放射線科 向井浩文

田口正人, 森山高明, 伊東祐治

同 第2病理 蓬井和久

鹿児島県立薩南病院 小山隆夫

国療南九州病院

宮園信彰

広津泰寛

肺原発性悪性リンパ腫の2例を、その画像所見を中心に、若干の文献的考察を含めて報告した。症例は、50歳男性と74歳男性。2例とも無症状で発見され、孤立性の結節影を各々右中葉、右下葉に認め、1例は結節影の内部にair-bronchogramを伴っており、もう1例は伴っていなかった。治療としては、2例とも外科的切除術が施行された。

肺原発性悪性リンパ腫の画像診断において、air-bronchogramは重要であると考えられた。

65. 気管支に原発した移行上皮癌の1例

佐世保中央病院外科 潤井照光

鳥越敏明, 國崎忠臣, 菅村洋治

石橋経久, 中尾治彦, 新宮 浩

同 内科 溝上明成

長崎大原研病理 関根一郎

症例は、胃癌の既往を有する、60歳男性で、右中葉の肺炎を契機に、右B10入口部の径8mmの隆起性病変を発見された。右中下葉切除+郭清を施行したところ、組織学的に移行上皮癌と診断され、気管支原発と考えられた。

66. 血痰で発見された孤立性気管支乳頭腫の1切除例

佐世保市立総合病院内科

増本英男, 古賀宏延, 須山尚史

荒木 潤, 浅井貞宏

同 外科 南 寛行, 塙田美佐雄

長崎大第1病理 永吉健介

松尾 武

症例は54歳、男性。B. I. 480. 血痰で当科受診。胸部X線上、異常影は認めなかった。気管支鏡を施行した所、喉頭や気管には異常なかったが、左B^a入口部に有茎性の約5mm大のポ